

〈シンポジウム〉

20周年記念特別シンポジウム「語用論研究の広がり：語用論の関連分野からの提言」

総 括

鍋 島 弘治朗

関西大学

本シンポジウムは、2017年12月16日(土)10:00~11:50に1時間50分をかけて、20周年記念特別シンポジウムとして「語用論研究の広がり — 語用論の関連分野からの提言 —」というテーマで行われた。意味論、音声学・音韻論、統語論の各観点から、松本曜氏(国立国語研究所)「意味論と語用論は近づいたか」、定延利之氏(京都大学)「民族音声学の夜明け」、酒井弘氏(早稲田大学)「含意と推論の基盤を探る」の各講師から各テーマでご講演いただいた。司会は鍋島弘治朗(関西大学)が担当した。

言語学の諸分野として一般に音声学、音韻論、形態論、意味論、統語論、語用論といった区分が挙げられるが、この区分の現状はどのようなものだろうか。語用論は他分野にどのように貢献できるのか、そもそも語用論と他分野はどれくらい明確に分かれているのか、あるいはどの程度、どのように関連するのか。このシンポジウムでは、各分野の一線で活躍する講師をお迎えし、語用論とはどのような分野なのか、講師の方々の分野やご研究と語用論がどうかかわるかをご紹介いただくことによって、語用論の幅広さ、住み分け、今後の重要な方向性をフロアと共有することを目的とした。

まず、松本曜氏から意味論と語用論の関連に関してご講演いただいた。松本氏は、認知言語学者としてよく知られており、近年では特に移動動詞の経路に関して、映像を使用したアプローチで成果を上げている。氏は、意味論と語用論が近づいたのか、その境がなくなったのかを論じている。結論から述べれば、認知言語学における意味論の立場からは語用論は大きく近づいた。しかし、語用論の立場からは意味論は近づいていない。

意味から見ると語用論が大きく近づいたことを、百科事典的知識、メタファー研究、捉え方(construal, 事態把握、事態解釈)の3点から例証している。

辞書的意味観を排し、百科事典的意味観を採用すると、語の意味は従来のような素性による定義的な規定ができなくなり、より実際の使用に近づく。また、松本氏はフィルモアのフレームも同様と論じている。身体化認知科学の観点から述べれば運動・感覚イメージがそのまま意味になるシミュレーション理論が百科事典的意味観に当たる。

Lakoff and Johnson (1980) のメタファー研究は、字義的意味と非字義的意味の区分の实在性に疑問を投げかけたことで意味論から運用の世界へと踏み込んだといえる。

さらに認知文法のラネカーによる〈捉え方〉の強調 (Langacker 1991 など) は、表現、意味、概念化者の三者関係を取り扱うことになり、「話者が表現によって何を伝えるか」を語用論の課題と考えるリーチ (Leech 1983) と呼応するという。

これらに加えて、4 節では、用法基盤モデル (Usage-based Model) と意味論の量的転回 (Quantitative Turn, Janda 2013) が紹介されており、これも意味論を語用論に近づける要因である。用法基盤モデルでは、「話者が実際に経験するのは個別例であり、一般性は個別性から生じる」とする。この用法基盤モデルを背景に、認知言語学の研究はコーパスや実験を用いた数量的な研究へとシフトしていった。これが量的転回であり、これも意味論と語用論を近づける要因であった。

このように意味論が語用論に近づいた半面、多くの認知言語学者は、意味論と語用論の区分を排したわけではなく (3 節)、意味論が語用論のすべての課題を取り扱うようになったわけでもないこと (5 節) が論じられる。

定延論文は音声学・音韻論の立場から、語用論への貢献、また語用論が音声学・音韻論に貢献する可能性について論じるというテーマであった。この論文は非常に興味深い現象を取り扱っているがやや難解であり (筆者の知識の欠如のためかもしれない)。語用論に対する示唆も一目でわかるものではない (こちらも同様である)。そこで、この場を借りて探索的に検討してみたい。

定延氏はまず、イエルムスレウの「パイの切り分け」的な意味観を否定的に論じる。パイの切り分けの意味観とは、定延論文の図 1、図 2 に例証されるように、通言語的な意味の世界の全体 (パイ) があり、各言語は「ただそれらをどのように切り分けるか」の点で違っているという考え方である。

これは、「パイの切り分け」的な意味観であるが、ここから、「パイの切り分け」的な形式観へと展開する。これが定延論文の非常にオリジナルな「新しい試み」である。つまり、音素、発声法、音調のレパートリーがあってその中から特定の形式を選び出すのが「パイの切り分け」的な形式観とすると、定延氏は、阿波踊りやムーンウォークの例を挙げ、運動 (形式の一種) のレパートリー (パイ) がそこにすでに十全にあるのではなく、新しい形式は無限に開発しえること、そしてそれが社会・文化的に継承されうることを主張する。これを説明するひな型として司馬遼太郎の小説から「掻き切るような威勢よさで手渡^{てばな}をかむ兄貴分と弟分の少年」の用例が提示される。

続いてこの新しい試み、「民族音声学」を例証する言語データとして、講演では 4 種類の例が音声と映像とともに披露された。それらは、①年配話者が上位者に対して恐縮する際の「口をとがらせる」話し方、②呆れた人物の物言いを実演する際の「口をゆがめた」話し方、③洋菓子屋の店先で若い女性の売り子が発する鼻にかかった (twang な) 発声

法、④これと異なる和菓子屋の売り子の発声法である。

約 20 年前に音声情報処理研究者から受けた質問「現代日本語共通語には、しゃべり方が何種類あるのか？しゃべり分けられる態度が何種類あるのか？しゃべり方と態度の結びつきはどうなっているのか？」に対する解答の方針が定まったという今回の民族音声学という主張には、以下の 3 点の主張が含まれると考える。

まず、しゃべり方やしゃべり分けられる態度は無数にあること。次に、しゃべり方は態度を伴っていること、これらは①と②の例にみられる。さらに、重要なこととして、こういったスタイルの話し方が、「民族」と称される社会文化的グループ特有の話し方として継承されることである（③、④）。今回の主張は、キャラ語の研究（定延 2011）や言語に与える情動の役割の研究（定延 2008）とも整合的である。

さて、今回の研究が語用論にとってどのような示唆を持つのか。第 1 に形式が意味とペアになっている点である。音調が特定の語用論的な意味を持つことはすでに知られているが、それ以外の発声法、音韻の歪み、音質、声色なども語用論的な意味を持つ可能性が高い。第 2 に、この現象が一般的であるならば、語用論をまず社会文化的な「民族」の観点から再分類する必要が生じることである。社会集団が先に存在し、その中で行われる慣行、伝えられる意味、人々のやり取りがあり、それが特定の形式を伴っている。そういった語用論を検討する必要に迫られるだろう。

酒井氏は、統語論と心理言語学・神経言語学の立場から、スカラー含意というまさに語用論の中核的現象を取り上げ、近年の最先端の研究をご紹介いただいた。実験的手法を使用した語用論研究に特化した国際学会である Experimental Pragmatics (XPrag) があり、「実験語用論」を掲げた様々な研究プロジェクトがあるという。

スカラー含意とは、酒井論文にあるように、some が not all を含意する現象である。

(1) A: How many students came to the class?

B: Some of the students came.

このテーマは大きく注目を浴びており、この推論の処理に関しては 2 つの仮説が考えられる。ひとつは、Levinson (2000) のように一般化された会話の推意 (GCI) で解釈が行われるというもの、もうひとつは、特定の含意計算過程が存在するという考え方である。酒井の紹介する Huang and Snedeker (2009) の実験によれば、含意の計算に 800 ミリ秒以上の時間が必要されるという結果になった。

この結果はまず、特定の含意計算過程が存在することを意味しよう。さらに、統語論と語用論との関連では、両者の処理が別々に行われる可能性を示唆する。

以上、松本論文、定延論文、酒井論文を眺望したが、一般には、語用論という分野は依然、独自の分野 (discipline) として確立されている印象を受ける。語用論は、他分野と関連し、協働しながらも、独自の領域として今後も発展を続けていくのであろう。

参考文献

- 定延利之. 2008. 『煩惱の文法 体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』ちくま新書. 東京：筑摩書房.
- 定延利之. 2011. 『日本語社会のぞきキャラくり 顔つき・カラダつき・ことばつき』東京：三省堂.